静岡県現地支援調整本部　派遣者報告

第１６次隊員　（平成 23 年 7 月 7 日～平成 23 年 7 月 16 日）

沼津駅周辺整備事務局　推進課　小見山　俊一

第 16 次派遣者　25 名（県職員 10 名　市町職員 15 名）

指揮班、本部詰め、遠野市班　　県職員 6 名

山田町班　　9 名（県職員 2 名、市町職員 7 名）

大槌町班　　10 名（県職員 2 名、市町職員 8 名）

配　属　先：山田町役場　上下水道課

担 当 業 務：**下水道公共桝の止水作業**

山田町の下水道本管は地震の影響を受けず機能しているため、津波や火災で家屋がない敷地にある公共桝から雨水や不明水が流れ込み、処理場の能力を超えてしまう恐れがある。そこで、公共桝からの雨水等を本管に流入する前に止める作業である。

その他業務：**山田町役場建設課の手伝い（時間外）**

仮設住宅入居募集の抽選に当選した方への電話連絡。

大槌町の仮設住宅台帳の作成（土日）

静岡県派遣隊大槌町班からの依頼で、大槌町仮設役場にて、各仮設住宅の入居者名簿の作成（名前・連絡先・家族構成等をパソコンへの入力作業）。

被 災 状 況：山田町ホームページ参照（全家屋の約５４％が被災）

○下水道止水作業

私は山田町役場上下水道課下水道チームの配属となり、下水道本管の止水作業を行った。

震災前の山田町は分流式であり、2 つの公共下水道処理区と 2 つの漁業集落排水処理区があり、公共下水道処理区の 1 つと、漁業集落排水処理区の 2 つが供用開始されていた。また、残りの 1 つの処理区も平成 26 年度から処理場建設が開始される予定であった。山田町の下水道本管はほぼ整備されているが、各家の接続は約 5 割程度である。震災後は、下水道本管の被災状況の確認等のために処理ができなかったが、供用開始されていた 3 地区については、5 月 1 日より下水道処理が開始された。しかし、もう 1 つの処理区の処理場建設予定地は、仮設住宅（120 戸）が建設されており、供用開始時期は未定である。

5 月に下水処理が再開されたが、各地区の津波等で倒壊した家屋の埋設されている排水管から雨水等が下水道本管より流れ込み、各処理場の処理能力を超えてしまう恐れがあるという問題が出てきた。そこで、6 月より山田町役場に緊急雇用で雇われた臨時職員 6 人と静岡県内からの派遣職員の 7 人体制で止水作業が開始された。

倒壊した家屋の敷地から公共桝を探し、止水作業という流れですが、瓦礫と海からの砂に覆われているため、公共桝を探すのに大変苦労した。（深いところでは１m近く掘らないと見つからない場合もあった）また、瓦礫の撤去のために重機が入った場所では、公共桝自体が壊れて蓋がないため、なかなか見つからないという場所もあった。（直径２０ｃmの白い蓋がある程度、目印になる）

船越地区のある現場では海から遠く離れており、標高も１０m近くある場所にもかかわらず、津波の被害を受けており、あらためて地震、津波の恐ろしさを知った。ちょうど住民の方と話をする機会があり、「最初は自分の家まで来ないだろうと思って庭で海を見ていたが、あまりにも大きな波が来るので慌てて２階の屋根によじ登ったよ。でも母親は持ってかれちまったよ。」と明るく話をしてくれたのだが、何も言えなかった。緊急雇用で雇われた作業員も自宅、会社が被災し仕事がなくなった地元の方であり、

仮設住宅にやっと入居できたという方もいた。現場での作業中に多くの地元の方に「ご苦労様です。」と声をかけていただくことが多いことが印象に残った。

被災者への対応も大切であるが、被災していない方々もいるため、今回の下水道の件や道路の補修、道路側溝の土砂の撤去等の通常どおり生活するためにすべきことはあるのだが、地元業者の数も少ないし、大手の業者は主に瓦礫の撤去を行っているため、道路関係の工事は進んでいない。

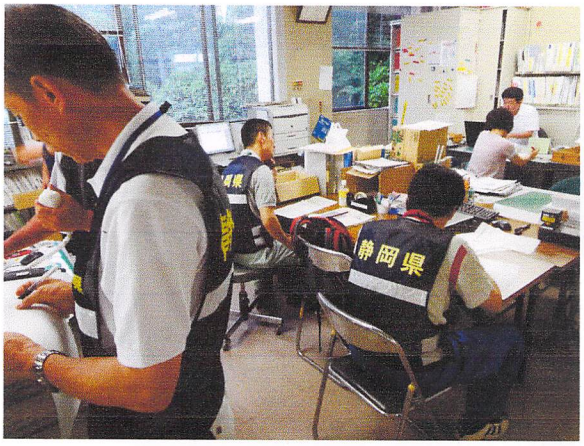
作業状況

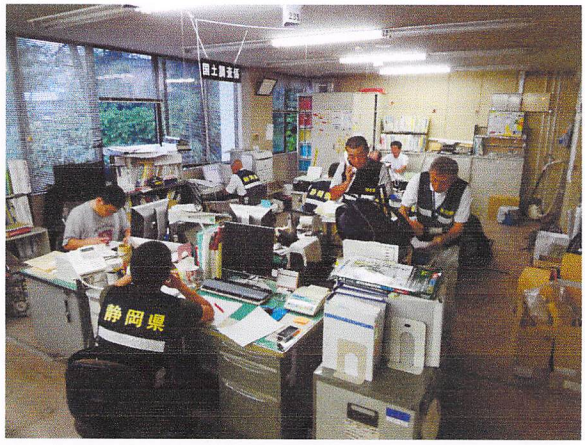
○建設課の手伝い

町では１７９０戸の仮設住宅を建設しており、７月中の全戸完成を目指している。完成した住宅から６月より入居を開始しており、まだ３５６戸が建設中である。

７月１１日に仮設住宅の抽選が行われ、私はその抽選の当選者への電話連絡をした。ほとんどの方が、当選の電話連絡を心から喜んでくれ、避難所生活から抜け出したいという気持ちであったと思う。しかし、現在建設中の仮設住宅もあり当選しても入居日が未定の場合が多く、喜びと同時にがっかりもさせてしまう電話連絡であった。

また、建設課に配属された派遣職員は、仮設住宅等への支援物資の配送作業を担当しており、住民からの要望により物資を発注・仕分け・配送までの全てを派遣職員だけで担当していた。（ボランティアの方の援助があるが、日によっていない場合もある）





電話連絡状況

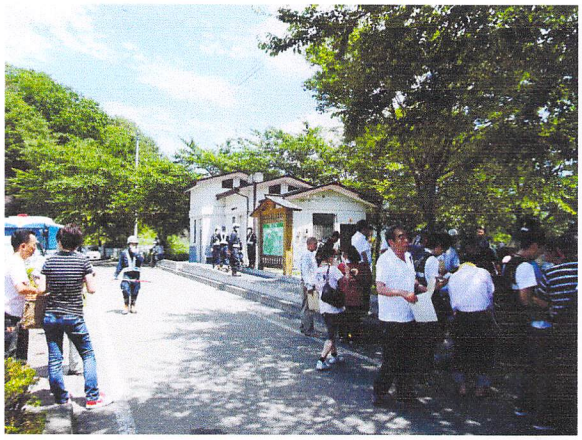
支援物資の配送作業

仮設住宅

○津波避難指示

７月１０日（日）午前９時５７分、三陸沖が震源の地震が発生し、午前１０時に津波注意報が発令され、大槌町は避難指示を出した。幸い大きな津波はなく午前１１時４５分に津波注意報が解除された。大槌町へ応援に来ていた私たちも仕事を中断し、高台へと避難をした。消防や警察、自衛隊車両が避難を訴えながら走っており、私は津波で避難することは生まれて初めての経験で緊張したが、大きな津波が来ないことがわかっていたためか地元の方には大きな混乱はなかった。

山田町でも津波注意報を受け、防潮堤の門扉が閉められるはずだったが、前回の津波で防潮堤が被害を受けたため、閉められない場所が多数あった。



避難風景

○その他

・山田町の防災組織は本部（役場）を中心に町内を 7 つの支部に分け、支部がある程度の意思決定を専決できる体制としていた。なお、支部は避難所を兼ねている。その地区に居住している職員が支部を運営する。

・孤立した地域は町の防災行政無線を使ってのみ連絡することができた。ただ、道路状況も分からない中、物資や人員を派遣する手立てがなく、「3 日間だけ頑張れ」としか伝えることが出来なかった。

・自衛隊員（できるかぎり上役）を災対本部に入れることが意思疎通を図る上で不可欠である。

・職員家族の安否確認について、3～4 日間連絡が取れない者が多数いた。

・白土室長の直属の部下（防災担当）は、今回の震災で母親、嫁、子供を亡くした。安否が確認できない状況で業務を遂行していたが、遺体が発見後、精神的に苦しみ、現在休職中である。

・知らないボランティア団体が多く来る。中には怪しい団体もあり見極めに苦慮した。

・山田町には北海道の「りばぁねっと」というボランティア団体が海上捜索ボランティアと参加した。後にボランティア全体の統括を社協と行うまでになり、災対本部会議にも警察機関と同様な位置づけで参加した。なお、依然としてボランティアの需要は高く、ボランティアセンターを解散させる時期にはない。

・ガレキ撤去は入札せず町内業者（組合）に発注したが能力的に不足した。大手のゼネコンの売り込み多く、結果として対応を依頼した。（委託契約）

・発災直後に発生する業務の費用については予算立てする前にどんどん発注せざるをえなかった。（ガレキの撤去等）

・支援に関して様々な自治体や団体等から要望、調査のための連絡があり、本来実施すべき災害時対応に支障をきたした。

・火災は 3 月 11 日の夕方に発生し、最終的な鎮火宣言は 3 月末であった。（山火事がなかなかおさまらなかった）

・火災対応は、消防団ポンプ車が使用できる状況にあったものの、道路が壊滅状態であったことから現場に近づくことが出来ず消火活動ができなかった。県ヘリは夜間であったため対応不可能とのことであり、翌日からの活動となった。津波被害を免れたものの、火災被害のより住宅を失った方も多かった。

・水門は全て津波到達前に閉門することができたが、津波はそれを上回ってきた。

・職員の疲労がピークを超える前に休ませたかったが、人手が足りず出来なかった。（全職員約 180 名中 80 名が被災者）

○最後に・・・

ニュースや新聞等で見て、ある程度はわかっていたつもりだが、実際に被害状況を目の当たりにすると、テレビや写真で見るよりも何倍も衝撃を受ける景色が広がっていることに呆然とする。既に派遣報告書にも記載されているが、山田町の危機管理室長白土靖行氏の「防災訓練はすべてが無事であるという前提で行われている。」という言葉が印象に残っている。地震発生後、瓦礫の山と火の海により、道路、通信設備が寸断された中での活動は大変だったと思う。また、白戸氏は、「地震の発生が明るい時間でよかった」と言う。「もし夜だったら、役場に職員は残っていないし住民も避難が遅れ、もっと多くの犠牲者が出てしまい、このような迅速な対応はできなかったのでは。」と・・・。

実際に現場を見て、当事者の話を聞かなければわからないことがたくさんある。ただ、役場職員をはじめ、町民の方々から聞く体験談にうなずくことしかできず、何て声をかけたらいいのか困る場面が多

かった。山田町に支援に行き、自分が少しは役に立ったのか疑問が残るが、確実に言えることは、山田町から教えてもらうことはたくさんある！ということだ。学ぶべきこと、改善すべきこと、山田町はそれら全てを持ち帰って欲しいと言ってくれた。

人として、自治体職員として、この経験が今の自分に少なからず影響を与えたことは確かであり、今後の生活でもこの経験があったからこその行動をすべきだと思う。

家に帰り子供に言ったことは、「大きな地震が来たらお父さんとお母さんは、すぐに迎えに行けないかもしれない。それまで、学校の先生でもいい、誰でもいいから大人に声をかけ、お世話になってなさい。必ず捜して会いに行くから、それまで我慢していなさい。」

山田町役場周辺

倒れた防潮堤

集積されるゴミ